

# 日台稲門会

ニュースレター—2024年新春号



発行所：日台稲門会  
会報・NL編集委員会  
office@nittai-toumon.com  
発行・編集責任者：根本 宏児



11月18日 台北福華大飯店にて

2023年台湾校友会年次総会&懇親会 (写真 相京 浩一)

## 新年の挨拶 根本宏児 会長

2024年が始まりました。今年もよろしくお願いいたします。

昨年は10月5日にホテルオークラで開催された台湾国慶節祝賀会に出席しました。主催の台北駐日経済文化代表処のお話では、コロナによる中断があったため、3年ぶりの開催となったようですが、約1,000名の政財界の関係者が出席され、アフターコロナと台湾への関心の高さを実感しました。

また11月19日には、台北で開催された台湾校友会総会懇親会に出席してきました。日台稲門会からは幹事を中心に9名参加し、総勢250名を超える盛大な宴席となりました。私も3年ぶりの台北訪問でしたが、台北のコロナ前と変わらない様子を実感すると共に、円安の実情も痛感してきました。

今年も様々な形で注目されることになる台湾ですが、日台稲門会としてもできる限り台湾を応援していきたいと考えておりますので、皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。



## 台湾校友会総会に参加して

あいきょう  
相京浩一

11月18日(土)台北福華大飯店において2023年早稲田大学台湾校友会総会が開催されました。日台稲門会からは根本会長、丸山幹事長、梶山常任顧問、小川幹事、川村淳一幹事、相京幹事、広谷幹事が出席しました。過去最多の240名余りが出席し、グリークラブの現役学生による男声合唱を楽しみ、現役応援部によるリード、チアリーディングにより、応援歌・校歌を熱唱し、盛会のうちにお開きとなりました。



翌日、11月19日(日)は大型貸切りバス2台に乗車して観光ツアーに参加しました。今回は台北市中心部の北に位置する陽明山エリアをご案内いただきました。車窓の風景が大都会からみるみるうちに大自然に移り変わっていきました。この地域は温泉でも有名などころです(今回は手湯・足湯を楽しみました。)。陽明書屋、北投図書館、北投温泉博物館、少帥禪園、北投文物館とめぐり、最後は天母にあるミシュラン一つ星の名店金蓬萊で晚餐をいただきました。台湾校友会のみなさま、2日間にわたり本当にありがとうございました。



早稲田大学応援部



台湾校友会  
吳昕陽会長



ツアー副総幹事



観光ツアー



観光ツアー夕食



川村幹事



総会・懇親会



早稲田大学グリークラブ

橋本さんから原稿依頼を受けたのが11月11日の幹事会。ニュースレターの発行は2024年の1月で選挙日が1月13日だから、この原稿が記事化されている頃にはもう既に選挙結果が明らかになっているかもしれない!という誠に不利な状況の下、筆者は書き進めなきゃいけない現実をまず皆さまにお伝えしておきます。



台湾で放送された林森北郎氏(三立TV)

物事には前提が必要で、やや古いデータ(9/8)ですが「美麗島電子報」の世論調査によると下記の通りで、11月15日まで私の認識も同様であった。

頼清徳 39% (緑) 侯友宜 21% (藍) 柯文哲 18% (白) 棄権予定 6% 浮動層 16% (\*左記三名が出馬した場合の支持率、郭氏は対象外) (注1)

ところが敦賀に出張していた私は11/16早朝、東洋経済 劉彦甫記者の「総統選に大異変、急転直下の野党統一候補へ」をオンラインニュースで受取る。(注2)

上の表に基づけば「藍白連合」の数字が21+18=39で緑と同数になる!

ただ劉さんの記事の示唆的なところは「野党連合はいつまで持つか」であった…。敦賀出張から帰京した私は翌日11/17台湾・台北に向かった。18日の早稲田大学台湾校友会に出席するためである。台湾校友会の会長は新光三越総経理の呉昕陽氏である。呉氏一族がその後副総統候補に一週間後に登場するとは全く予想できなかった。

台北の街中を歩き廻ったが選挙への盛り上がりは全く感じられない。郭台銘ラッピングバス(この時は第四候補)だけがやたら目についた。ただホテルのTV(民視・公視・三立)では柯文哲の嫁さんと母親が何やら「涙の会見」を繰り返して放送していた。日にちが相前後するが11/22新宿歌舞伎町「青葉」で前出の劉記者に隣席させてもらった時の彼の話によると、野党連合上の条件に不平・不満等が主な涙の訳だったらしい。

帰国した11/20に「頼清徳氏、副総統候補に蕭美琴(駐米大使相当)氏を指名」のニュースが流れた。(注3) 母親が米国人、生まれは日本の神戸。習政権の戦狼外交に対し「戦猫外交」を称しており、蔡英文氏の親友で「猫好き仲間」とのことである。

21日から23日まではネット上も(侯柯郭)「三方会談」「三方会談破断」「柯郭結束?」等のニュースがだらだら垂れ流された(22日は上述の通り、省略)

そして11月24日「野党連合破棄、副総統候補出揃う」となった。(注4)

民進党 頼清徳 蕭美琴(駐米大使相当) 【支持率31.4%】 (注5)

国民党 侯友宜 趙少康(元立法委員) 【支持率31.1%】

民衆党 柯文哲 吳欣盈(下記参照) 【支持率25.2%】 (郭台銘は不出馬)

吳欣盈氏は女性企業家で、新光集団創業者の孫、父親の吳東進は早稲田大学卒。(注6)

前出の吳昕陽台湾校友会会長の親戚関係にある。(おじいちゃんが兄弟なので日本流に言えば「はとこ」の関係) (注7) 呉一族の結束は強く柯文哲にとっては心強いはず。

ここで一週間前にお会いした呉会長が総統選挙に繋がった?!

それにしても11/16の藍白連立発表から破棄までの一週間、なんだったのだろうか?

東洋経済劉彦甫記者は「余計な一週間」と評した。(注8)

美麗島電子報では頼氏と侯氏支持率は接近したが、副総統候補の登場によりどう変化するか? 国民党の趙少康氏は弁が立つ親中派といわれるが、中立派の支持が逃げる可能性もある。民衆党は吳欣盈氏の登場により財力が期待できるが、柯文哲氏を支持する多くの若者がここをどう捉えるか? 副総統候補の登場で支持率が変化することは間違いない。

私は、今年の夏、東京台湾の会会長として日本国内において全日本台湾連合会様主催「頼清徳支援集会」(於:日本記者クラブ 三立TVに映った(笑)(写真))

そして中山学会様主催「侯友宜支援集会」(於:目黒雅叙園)にも両方、招待参加している。

あれから約100日。不思議な一週間と多彩な副総統候補の顔ぶれは全く予想できなかった。

あと50日、何が起きるのか? また予想外の事が絶対起きる予感もある。

現地は盛り上っていくのか? 2024年の総統選には蔣万安氏が出馬するとの噂もある。

現地に行ってもわからないが、行かないでわからないより行ってわからない方を選択し、12月そ

して総統選挙前夜、台湾に行つて来ます！

**【出所】**

- (注1) Yahoo ニュース 9/12 NNA 配信、ちなみに 11/15 は私の誕生日。
- (注2) 11/16 東洋経済オンライン劉彦甫氏記事
- (注3) 11/20 産経新聞
- (注4) 11/25 東京新聞
- (注5) 美麗島電子版 11/24 発表世論調査で頼氏支持率・侯氏同・柯氏同の数字である
- (注6) 劉彦甫氏 11/24 X (旧 Twitter)
- (注7) 渡邊義典氏よりのメール
- (注8) 劉彦甫氏 11/24 Facebook

追伸：11/28 歌舞伎町台湾料理屋「叙楽苑」で呑んだ大手新聞社の女性が教えてくれた情報。「林森北郎さん！今 Netflix で『WAVE MAKERS 選挙の人々』という台湾ドラマが面白くて、#Me Too 運動も起きている…正に総統選挙のドラマ、おすすめですよ！」って。

**早大グリークラブ若者に垣間見えた光明 丸山弘子（幹事長）**

2023年11月18日に開催された台湾校友会に、呉昕陽会長の肝いりで、早大グリークラブ35名の皆さんが招待されました。総会のパフォーマンスとして、呉会長の狙い通り名門グリークラブの歌声は会場を大いに和ませました。

翌日、台湾校友会側がセット下さった日本とかかわりが深い観光にもグリークラブの皆さんは参加され、直に台湾の今昔を見聞する「百聞は一見に如かず」の機会でした。

我々が訪れた「少帥禅園」は1920年に建てられ、元々は新高旅社であり、日本の台湾占領後期には神風特攻隊の宿泊所として使用されていました。1960年代の蒋介石もここに住んでいました。また、張学良も軟禁生活をここで過ごしていたそうで、早速、学生に「張学良と聞くと、何を思い出しますか」と尋ねると、「西安事件」、「張作霖の息子」など即答されたので、さすが早大生と感心しました。目の前の学生と同じ世代の神風特攻隊が宿泊されたと伺い、平和の有難さを痛感しました。

学生の中には中国語履修者も少なからずおられ、観光中に漏れ聞こえたその発音や声調の確かさに思わず拍手を送りたくなる場面がありました。

夕食では、グリークラブの学生が返礼に「都の西北」などを合唱され盛り上がりしました。食事中、指揮者が構え「オン」のスイッチが入ったら、高らかな合唱に変身。その見事なまでの「オン」と「オフ」の使い方に感銘すると同時に、彼らの見識に今後の日台関係の担い手となる光明が垣間見えました。



(新北投駅にて)

**【幹事会便り】 早川友久氏を迎えて懇親会を開催しました (渡邊義典)**

李登輝元総統の秘書として、李登輝氏と日本をつなぐ場面で大活躍をされた早川友久さんの一時帰国の機会に日台稲門会幹事会有志で早川さんを囲む懇親会を企画し、12月13日(土曜日)に催すことができました。

早川さんは早稲田大学卒業、金美齡氏の事務所で秘書を経験した後に台湾大学に留学、その後、李登輝元総統の秘書になったという経歴の持ち主です。

日台稲門会の方々も連絡その他で何かとお世話になりました。日台稲門会のリモート講演会に講師として台湾からお話をして



もらったこともあります。また台北稲門会の副会長でもあります。  
李登輝元総統のご逝去後は、日本台湾交流協会（日本大使館に相当）の勤務で、引き続き日台の架け橋として活躍しています。

今回の帰国では、日本李登輝友の会の講演会講師も務めるとのこと。講演会は12月14日に開催され、約200名もの人が参加という大盛況で、日台関係の要人の参加も多く、当会からは岩永名誉会長が参加されました。

早川さんの一時帰国の機会に懇親会を！と、梶山顧問が発案、丸山幹事長が早川さんとの連絡係や店の予約など一手に引き受け、無事開催の運びとなりましたが、当日、残念ながら丸山幹事長は体調不良で欠席となりました。

懇親会の店は、広谷幹事の紹介で高田馬場2丁目の「香港居酒屋華翠苑」を予約しました、当日、店に行くと、早川さんも旧知の吉村剛史氏（元産経新聞台湾支局長・現在 THE NEWS LENS 編集長）と、山本幸男氏（台湾協会）も当会とは別にいらして、せっかくだからと席をつないで一同の宴席としました。

乾杯の後に、早川さんから、目前に迫った台湾総統選挙と立法委員選挙について最新の情勢を話してもらいました。さすがに台湾政治の中枢に詳しい人であり、我々が日ごろ報道で接する以上の核心的なお話を聴くことができました。参加者全員、呑むのを忘れて聞き入り、深く認識を新たにしました。

その後、参加者から様々な質問が提出され、それへの一つ一つ回答は、みんな「なるほど！」と納得したものでした。具体的な内容は、このニュースレター発行時には選挙の結果が出ている頃なので割愛します。

その後は本当に懇親会となって、台湾の懐かしい話や、共通の人たちの消息、早川さんの現在のご活躍の内容など文字通り談論風発でにぎやかに進行しました。お酒は飲み放題で、料理もおいしく、出された皿はすべて完食でした。

あっという間に制限時間の3時間が経過し、名残惜しいながら、一本締めで打ち上げることとなりました。

早川さんは帰国の際に所用で何度も早稲田大学を訪れたそうですが、学校界限で飲むのは十数年ぶりとのこと、懐かしく思ってもらえたようです。

なお、早川さんは、次回は4月頃に一時帰国するそうで、その時にまた懇親会ができれば参加してもらえそうな感触でした。ぜひ再会したいものです。

### 春季講演会の御案内 2月3日（土）15:00～

春季講演会の案内を致します。

講師：李明峻（Li Mingjuinn／り・めいしゅん）

演題：『2024 総統選挙後の台湾と日本、  
その変化のありよう』（仮題）

開催日時：2024/2/3(土)15:00～17:00（14:30、受付開始）

会場：早稲田大学 22号館（留学生センター）2階 201教室

#### 【講師略歴】

1963年台南生まれ。京都大学法学博士。

専門は国際法と東アジアの国際政治。

現在、新台湾国策シンクタンク研發長（主任研究員）、台日文化経済協会副秘書長など。

また、中華民国相撲協会理事長も務める



早稲田大学台湾留学生會より

早稲田大学台湾研究所主催「2024年台湾総統選挙研究会」1月26日（金）17:30～

当会でも講演をしていただいた小笠原欣幸氏（東京外大名誉教授）による台湾総統選挙結果分析の案内がありました。小笠原先生の Facebook より引用いたします。

日時：2024年1月26日（金）17:30-20:30

場所：早稲田大学 3号館 602 教室（6F）

司会：川上桃子（アジア経済研究所）

報告1：小笠原欣幸「総統選挙と立法委員選挙の分析」  
報告2：松田康博「台湾総統選挙と米中台関係」

主催：日本台湾学会・早稲田大学台湾研究所

備考：参加費無料，事前登録不要，どなたでも参加可  
（会場入口でお名前，ご所属，email を記入）。

途中10分間の休憩あり。オンライン配信はありません。



小笠原先生の Facebook より

【旅の手帖】バシー海峡と紅毛港保安堂 梶山憲一（常任顧問）

▼バシー海峡戦没者慰霊祭に参列

11月19日午前に行われた2023年の「バシー海峡戦没者慰霊祭」への参列は、当初は叶わないはずだった。

11月18日夕刻は、今回の訪台のメイン・イベント「日本早稲田大学台湾校友大会晩會」に参加、その夜は台北で泊まるつもりなので、南部に着くのは午後になってしまう。ところが、細かい事情は省くが、その夜のホテルの予約が取れず、やむなく深夜の高速バスに乗り、早朝には高雄に着いたので、参列することができたのだった。



高雄から車で2時間、台湾の最南端にも近い恆春鎮の猫鼻頭にある「潮音寺」で慰霊祭が行われた。

先の大戦で、台湾の鵝鑾鼻岬とフィリピンのバシー諸島（バタン諸島）との間の海峡で、日本側は兵士や輸送船の乗組員など25万人を超えるともいう戦没者を出した。慰霊祭は、このバシー海峡での悲劇を人びとの記憶にとどめ、その御霊を慰めようと毎年行われているものだ。

今年は80人といったところだろうか、交流協会高雄事務所長や台湾協会台北事務所長（栖来ひかりさん）などの挨拶のほか、参集した日本人や台湾人が祈りを捧げ、読経のなか次々にお焼香をしていった。

慰霊祭や潮音寺についての詳しい事情は、「バシー海峡戦没者慰霊祭」で検索してみしてほしい。



慰霊祭 HP より

## ▼紅毛港保安堂での一夜

潮音寺での式典が終わると、バシー海峡の海に献花に行く一行もあったが、私は往路で乗せてもらった車で高雄へと向かった。途中、昼食をとったり、東港の魚市場に寄ったりして、高雄までの道のりは5時間近くかかり、高雄はしだいに薄暗くなりつつあった。そして着いた先は、「鳳山紅毛港保安堂」である。ここは、バシー海峡に沈んだ第38号哨戒艇の艦長らが祀られている廟であり、先ごろ安倍晋三元首相の銅像が設置されて、最近では日本でも話題になった場所である。

実は私は、この保安堂の管理も担う信者の面々とともに車5~6台で潮音寺へと向かい、また高雄に戻って来たのだ。20年来の友人が、この保安堂で日本人参拝者に応接するボランティアをしていることから、慰霊祭に連れていってもらったというわけだ。

その夜は、保安堂の管理棟の一室で信者の面々15名ぐらいの人と大きなテーブルを囲んで、夕食というか、飲み会を共にした。酒の肴は、東港の魚市場で買ってきた魚や野菜を、友人はだし料理をする1人が腕をふるった何皿もの料理だ。酒はウイスキーだった。

グラスを口に運ぶごとに、彼らと話す私の華語もしだいに流暢になっていく。彼ら同士は台湾語で話すのだが、私はそこまでできないので、華語のあいだに時折台湾語をはさんでお茶を濁しておいた。

と、私の隣りに座っていた友人が私に耳打ちをする。

「いま部屋に入って来たのは、地元の親分だよ。酔うと暴れるんだが、今日は奥さんも来たからダイジョウブだ」

その親分は、奥さんのほか子分も従えていて、その子分がテーブルに置いたのは、高粱酒の大きな壺だった。そして、親分は私の隣りに座ってくる。テーブルに置いた浅黒い掌が大きくて厚い。

と、反対側の隣にいた友人は、何気なく席を立っていくではないか。

で、私は親分が差し入れてくれた58度の高粱をちびちび飲（や）りながら、親分と話すことになった。テーブルの向かい側にいた1人が、私が日本人だと紹介してくれたので、私は華語で簡単な自己紹介をした。で、親分も華語を使ってくれた。

ひとしきり話したあと、「で、お前は何歳なんだ?」と訊いてくるので、「70歳。もう古稀だよ」と言うと、「ずいぶん若く見えるな。オレは73歳だ」と、スゴみのある笑顔を浮かべる。そして急に、「お前はオレのオオシャンだよ」と言って、ハグしてくるではないか。

「オオシャン」、漢字で書けば「偶像」、アイドルってことだ。

親分に「オレのアイドルだ」と言われて可笑しくなって、私も親分のゴツい背中に腕を回した。

その親分が奥さんに連れられて帰っていったあとも、飲み会は続いた。ずいぶんと愉快的ひとときだった。

この保安堂でボランティアをしている友人は台南に台湾人の奥さんと暮らす自宅があるのだが、週に4日は保安堂内で泊まっているという。「長い夫婦だから、離れる時間もあるほうがいい」んだそうだ。

で、私も友人が泊まっている部屋に、簡易ベッドを出してもらって宿泊した。

翌朝、明るくなってから保安堂内を巡り、安倍晋三元首相の銅像とも対面した。それから、台南、台中をめざして保安堂を後にしたのは昼近くになってからだった。



保安堂 (Wikipedia より)

## ★バシー海峡戦没者慰霊祭

<https://bashi-channel.com/>

## ★鳳山紅毛港保安堂

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%B3%B3%E5%B1%B1%E7%B4%85%E6%AF%9B%E6%B8%AF%E4%BF%9D%E5%AE%89%E5%A0%82>

### 今年度新入会員紹介

今年度に入会された方9名を紹介いたします。(2023年12月末時点。入会順、敬称略)

吉川晶 / 町田健司(会友) / 越野充博 / 黄一桂 / 川田博幸 / 関口慶太 / 長谷川登三男 / 亀ヶ谷政則 / 跡部靖夫

入会のご挨拶

<町田健司さん>

このたび会友となりました三台会（東京台湾三田会）の町田です。

台湾とのご縁は、2011年1月1日付けの伊藤忠台湾駐在から。

まさに着任2か月半後の東日本大震災への「加油日本」のとんでもない世界一の義援金とご厚情に接し、それまで全く台湾の歴史を知らずにいた自分が一気に「我愛台湾」台湾シンパに。

台湾映画「時光之絆」での銀幕デビュー、台湾舞踊会に台湾茶会、日本人会フェスティバルなど様々な文化イベントにも参加させて頂き日台文化交流の思い出は尽きません。

今後とも宜しく願います。

町田健司 香川県名誉大使（台湾担当）



左より：映画「時光之絆」出演 /日本人会フェスティバルにて /台湾舞踊会にて /台湾茶会でのおもてなし

<川田博幸さん>

1978年政経学部政治学科卒業の川田博幸です。

台湾には2003年から2009年まで赴任していました。

この間2003年末の圓山飯店での交流会総会参加をきっかけに、稲門会活動に関わるようになり、当時の北村会長、その後の高橋会長の後を受け、台北稲門会会長も務めました。

昨年6月に約20年間の海外生活を終え、帰国しました。よろしく願います。

<亀ヶ谷政則さん>

2016年国際教養卒の亀ヶ谷です。台湾の玉山(ユィサン)銀行東京支店に勤めています。12年間滞在した台湾が好きで、台湾好きの皆様方とのご縁を育んでいきたい思いで入会いたしました。趣味はグルメの食べ歩きとゴルフです(上手ではありませんが)。今後ともどうぞ宜しく願います。

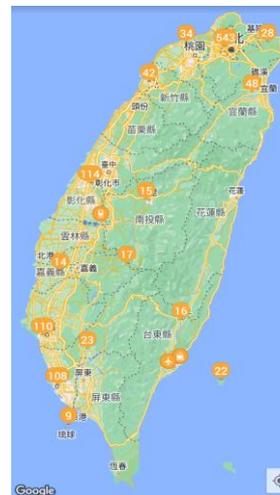
<跡部靖夫さん>

神奈川県出身、1997(平成9)年に早稲田大学社会科学部を卒業した跡部靖夫(情報処理安全確保支援士)です。母方の祖母の兄弟姉妹が台南州嘉義郡嘉義街(現在の嘉義市、2014(平成26)年の台湾映画「KANO」の舞台)生まれの「湾生」で、近くに住んでいた大叔母から当時の昔話を聞くことがたびたびありました。

社会に出た後、昔話の足跡を辿りに台湾各地を夫婦で巡ったり、以前の勤務先の台湾法人の仲間と酒を酌み交わしたり、台湾人の先生からクヅク(ポポモフォ。注音符號)で中国語を習ったりしながら、台湾との縁を深めていました。昨年、台湾就業金卡(フリーランス向け査証)を取得したので、仕事(情報セキュリティ分野)でも台湾との繋がりを深めたいと考えています。

よろしく願います。右図：台湾各地区での滞在日数

- 1位：台北 543日
- 2位：台中 114日
- 3位：台南 110日
- 4位：高雄 108日
- 5位：宜蘭 48日
- 6位：新竹 42日
- .....
- 9位：緑島 22日



2023 年日台稲門会秋季講演会 元産経新聞台北・上海支局長 河崎眞澄 (東京国際大学教授)

秋季講演会報告をいたします。(詳細は配信済みの HP 掲載・登録先宛てメールをご覧ください)

講師：河崎 眞澄 (かわさき ますみ)

演題：第四次台湾海峡をめぐる視点

開催日時：2023/10/28(土)15:00~17:00

会場：早稲田奉仕園リパティールーム



東京国際大学より

ご紹介頂きました河崎です。  
今日は第四次台湾海峡危機というテーマでお話しさせていただこうと思います。

第三次海峡危機は、1995 年から 1996 年 3 月にかけて人民解放軍が初めて弾道ミサイルを台湾に向け発射し、96 年 3 月 23 日に李登輝総統が初めて民主的総統選挙により総統に当選した時です。来年の 1 月には 8 回目の総統直接選挙が行われますが、台湾の民主化進展に伴い、当時の第三次台湾海峡危機と現在の第四次台湾海峡危機は共通点や相違点が多々あると思われます。

ただ、現状はあまり楽観できる状況ではないと考えています。

過去の 3 回の海峡危機と何が異なり、共通しているのか、台湾海峡危機を常に起こしている側が改革開放以来 45 年間でどのように変わってきたのかを考えると、この 11 年間の重みを感じています。

第一次海峡危機時(1954-55)、第二次海峡危機時(1958)には、中華民国が米国や日本と国交を持っていた時代で、中国人民解放軍は陸軍中心で海の対応に弱く、福建省沿岸の離島の攻撃が主体で台湾本島への攻撃は想定していませんでした。結果、馬祖島北方にあった大陳島などが解放軍に奪取されたということがありました。

第三次海峡危機(1995-96)の際は、李登輝さんは相当強い胆力で中国の圧力を退けようとし、そして台湾の有権者達も軍事的脅威に強い反発を示して、結果的に 96 年 3 月の直接総統選挙では李登輝氏が 54% という圧倒的な得票率で当選しました。当時、李登輝政権の対米情報網はかなり深いところまで及んでおり、尚且つ中国共産党とも深い情報関係を持っていたことも効果があったと考えられます。(「ミサイル発射はするけれど、変に反発したり、反撃するようなことはするな。ミサイル発射は中国の国内向けメッセージだ」)

結果的に李登輝さんは、中華民国の総統から台湾の総統になりました。それから数えて今回が 8 回目の直接総統選挙ということになります。

今回は第三次危機時に比べて、経済力、軍事力が中国有利に大きく傾き、両者の差がついています。第四次台湾海峡危機は昨年 8 月 3 日、4 日のペロシ米下院議長来台から始まっていると思いますが、ペロシ氏訪台翌日、台湾を取り囲む海域に人民解放軍が福建省、江西省から弾道ミサイルを撃ち込みました。これはまさに(謝長廷代表の言葉を借りれば)安部晋三元総理の「台湾有事は日本有事且つ日米同盟の有事である」といったことの証左でしょう。これは、もはや一過性のものと考えてはいけないというのが私の考えです

ただ、バイデン政権の台湾問題に対する真剣度に関してはちょっと心配です。11 月に習近平主席が訪米してバイデン大統領と会談しますが、米中間がどういふ距離感を取るかというのも総統選挙に大きく響いてくるのではないかと考えています。

台湾は日本と同様に中国、ロシア、北朝鮮という核兵器を持っている三か国と接しており、なおかつ国内では、日米も台湾も保守とリベラルの二極分化の影響も大きく、これらも選挙に大きく影響する可能性があります。

合理的に判断すれば、今すぐ戦争が起きる可能性はないと思います。中国人民解放軍、共産党、習近平総書記の考え方を総合的に考えると100%勝利するということが確信できなければ台湾本島を攻撃することには躊躇すると思われるからです。仮に7~80%中国が勝利したとしても中国側にも大きな被害が出て、さらに日米欧すべての国が中国に益々敵対するリスクが極めて大きいからです。しかし、合理的な判断が今できるかどうかというと、ここ一年大きな疑念を抱いています。集団的指導体制から習近平の独裁体制となり、習近平一人で全ての判断が出来るため、予測不可能な状況になっています。合理的な判断が出来る状況にあるのかという点が極めて重要なこととなるでしょう。

## ■「21世紀は中国の世紀」といわれたが、その現状

中国の輸出動向で特に大きかったのは2001年12月のWTO加盟で、台湾は10年程前から加盟条件を満たしていましたが、中国の加盟まで待たされていました。

2012年を境に中国はすっかり変わってしまったというのが私の認識です。文化大革命が終了して1978年暮れに鄧小平が三中全会で改革開放路線を取り79年に経済特区が始まり、この時日米や欧州の経済界は期待に沸き立って皆、21世紀は中国だろうと考えました。途中天安門事件で様々な影響はありましたが、92年に鄧小平氏の南巡講話で社会主義市場経済の発想が出てきて、香港返還の際には一国二制度が採用されました。この発想と行動パターンは非常に客観的だと感じます。95-6年の第三次危機の時も李登輝さんだけでなく、密使の曾永賢さんやそのカウンターパートであった中国共産党の葉選寧さんも客家であったことも最悪の状況を回避することとなりました。その後、中国は名目GDPであつという間に日本を追い抜いて2010年に世界第二位になりました。上海万博を見て本当に中国って凄いなと思いました。その時日本産業館の館長をされていた堺屋太一氏も、「上海万博が終われば個人消費が爆発して中国は成長し、衣食足りて礼節を知る国家になるのだろう」と言われて皆、期待していました。

2012年の共産党大会で習近平さんが共産党総書記になり、翌年全人代で国家主席を兼務しましたが、2012年以降はGDP成長率は下降の一途、また米中貿易摩擦、コロナ等いろいろなこともありました。成長率低下の最大の原因は、権力闘争のため経済政策に優れた指導者を次から次へと排除していったことではないかと思っています。この10年間で経済が大きく落ち込み、不満の増大、昨年共産党大会を前に北京で起きた事件(胡錦濤中国共産党大会途中退席事件)、ウイグル問題、コロナに起因し起こった若者の抗議などもあり、現在は中国全体が社会不安の暴発前夜の様相を見せているかのようです。

それから香港住民の弾圧。何度も出張して取材しましたが、デモが繰り返され、本来であれば2047年まで50年間保証されていたはずの報道の自由や言論の自由が二十数年で根こそぎ弾圧されてしまいました。

1984年12月の中英合意(サッチャー首相と鄧小平さんの間の取り決め)は国際条約で国連にも登録されている条約ですが、これを一方的に破棄するという事態になりました。

米国のPew Research Centerの世論調査によると中国の外交政策、「戦狼外交」(他国に100%の責任はそちらにあると罵倒する外交)が中国の国益を棄損していると考えた国が殆どです。(米国の77%、日本の85%が戦狼外交は中国の国益を棄損していると見てる。統計をとった24か国の平均では76%が戦狼外交は中国の国益を毀損しているとみている)

## ■習近平政権下で起こっていること

2016年のトランプ政権以降、2018年に中国に関税をかけ中米関係が悪化し、昨年10月の第二十回共産党大会で習近平氏が異例の第三期目になったということがありました。習近平氏が毛沢東を辿る人生を送ろうということになると、

2049年10月1日に中華人民共和国設立100周年(元気であれば96歳になっています)

2021年7月1日に中国共産党創設100周年

2027年8月1日に人民解放軍創設100周年

3つの100年を一人が祝えることを狙っているのかなとも思われます。

9月に中国は新しい地図を発表し、従来の九段線に加え台湾の北側に十段線を引きました。いずれは十一段線にしてもっと伸びるのではという気がします。フィリピンが起こした訴訟で2016年7月にハーグ国際司法裁判所は、南シナ海の領有に関する国際法に則った判決をだしましたが、中国はこれを無視しました。国際法や国際秩序よりも中華思想を優先し、国際法や国際秩序は自らが利用できるときは利用するが、それ以外は（中華思想に基づいた）自らの判断で行動するということが明らかになり、2012年以降より明確になってきています。

それから日本の製薬会社社員が逮捕された反スパイ法。日中関係だけでなく、国際経済関係を考えた場合、中国にとって自爆行為とも言えるものではないかと思えます。

中国に対する外資の直接投資がこの4-6月の統計で87%減少しており、外資の追加投資ももう無理ではないかと思われています。

反スパイ法以外に「国防動員法」など様々な国内法があり、もし有事が起きた時に10万人もいる日本人駐在員やその家族、あるいは日系企業で働いている従業員が人質になるのではないかと懸念されます。

一帯一路に関しては、イタリアは脱退する方向ですし、今年開かれた一帯一路国際会議でも参加者が前回、前々回に比べると大幅に減少しました。一帯一路という政策は失敗、少なくとも成功はしなかったということではないでしょうか。

それから、次々と消える共産党幹部。（ロケット部隊の幹部の解任(8月)、泰剛外相の解任(7月)、李尚福国防相の解任(10月)。昨日(27日)は李克強前総理が亡くなりました。）これら共産党幹部の排除が今後大きな事態を巻き起こすのではないかと、1989年4月の胡耀邦元国家主席が亡くなった後の事件を想起される方も多いのではと思います。

## ■中国にどう対するべきなのか

2014年12月13日、南京事件の式典で習近平国家主席が「我々はある少数の軍国主義勢力が侵略戦争を起こしたとしても、その民族そのものを敵視すべきではない」という共産党古来の二分法を述べていました。これは我々も参考にすべきことであって、中国14億の人々を見る際、国を誤らせているかもしれない極めて少数の人々と一般の人々を分けて考えていくべきだろうというのが基本的な考えです。

したがって、好きとか嫌いとかの感情論と冷静な議論は分けて考えていくべきですが、先ほど触れた米国のPew Research Centerの統計では、対中好感度について今年の7月のデータでは、アメリカで中国を余り好ましくないと思っている人が83%、スウェーデン85%、G7各国も軒並み高く、日本は87%となっています。この傾向は、2012年以降段々と高くなってきています。この10年間で中国との精神的デカップリングが始まっていたということが分かります。

日中の最新データでは日本で中国を好ましくないと思っている人が92.2%という極めて厳しい数字となっています。ただし、中国側からみると日本を好ましくないとする人が63%、好ましい人が37%と分断化は日本より激しくない結果となっています。

一方で世界は台湾をどう見ているのでしょうか。米国は好ましいが65%、英国60%、スウェーデン53%、イタリア47%、日本は82%となっています。

先ほど言ったように好き嫌いや感情論ではないのですが、これは有権者の投票行動に直結するのではと思っています。

外交関係が狭まる中で、このままで良いのかと考えている有権者も多いはずで米国の世論を始め、外国での好感度評価が有権者にじわじわと響いていくのではないかと思っています。来年は4月に韓国の総選挙、日本は9月に自民党内の総裁選挙、11月に米国の大統領選挙で選挙イヤーとなっています。好感度調査というもの決して侮れないかと思っています。

9月28日には台湾初の国産潜水艦の進水式がありました。米国のAIT（米国在台湾協会）や日本交流協会の台北副代表も参加しましたが、これは何を意味しているのかということです。この潜水艦には十数か国が様々な形で協力をしていて、選挙を前に西側の民主主義国は一致団結して台湾の国防支援にコミットしたということを示しており、その効果は大きかったと思います。勿論、中国としては原潜が8隻、合計で78隻の潜水艦を持っているので台湾の潜水艦は大きな脅威ではありませんが、中国の空母に対する抑止効果としては大きいものがあると思われます。それ以上に、国際社会は台湾の側にいるぞということを示した、メッセージ効果こそが大きかったのではないのでしょうか。

日本は今、CPTPP(環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定)という先進的な経済協定に於いて極めて大きなリーダーシップを取れる立場にあるので、総統選挙の前遅くとも蔡英文政権の任期中に岸田政権としてはCPTPPへの台湾加盟の道筋をピシッと示すべきであろうと思います。

経済的な問題としてみた場合、WTOと同じく、台湾、澎湖、金門、媽祖特別関税地域としてCPTPPへ加盟すれば国際法上も何ら問題ないはずなので、これをぜひ岸田政権に実現して頂きたいと思っています。

### ■台湾の若者は「二大政党」に嫌気？

それから最後の話題の選挙ですが、8月末から9月初めにかけて行われたTVBSの世論調査によると、民進党の頼清徳さんが全体的には30%でトップ、2位が前台北市長の柯文哲さんで23%、次が国民党の侯友宜さんの19%、それから郭台銘さんの14%ということです。

私が注目しているのは年齢層による差が極めて大きいという点です。例えば60歳以上では頼清徳氏が41%、柯文哲の支持は僅か4%。それに対して20代では頼清徳支持が20%で柯文哲は47%となっており、年代によってグラデーションの様になっている。これが何を意味しているのか？学生さん達に是非聞いてみたいと思っています。

選挙関連で月刊「正論」12月号でも書きましたが、政権生命8年のジンスクス、つまり96年の選挙以来8年以上続いた政権はないということです。

なぜかという、96年以來の選挙を見ていると有権者はどちらかと言えば、せっかちで画期的な結果を求めるのかなとも感じています。政権交代が起こったからといって憲法が今すぐ変わったりするわけでもありません。理想と現実を如何捉えていくかが重要になると思います。

それから疑米論、米国は本当に大丈夫か(有事に助けてくれるか)、日本もどうなんだ？といった情報も流れていますが、これは台湾の調査会社の調べでは84件の内70件くらいが中国共産党絡みだということが分かっています。つまり様々な情報戦、心理戦というものが既に中国から来ているということになります。

又、世代間や族群での違いもあり、台湾に何世代も暮らす「本省人」家庭であっても、少数派の客家と大多数の閩南系の方々の間には、選挙をめぐる温度差があるように感じます。多くの選挙運動の場面で使われる「閩南語」に対して、客家の人々は違和感を抱いているのではないかと。すなわち「閩南語族」だけが「台湾人」ではないはずだというような複雑な思いです。

それから共産党政権による干渉、資金の流入やメディアの偏向や「買票」といったこともありそうですね。

台湾の地勢学的位置付けを考えると、台湾という地を舞台とした第四次海峡危機、文明の衝突というものが正に今起こっているという危機感を共有して頂けたらと思っています。

(小椋和平 記)

### 編集後記

能登半島地震で被災された皆様には心からお見舞い申し上げます。夜中の地震を想定して、枕元には履物(ガラス対策)と笛(閉じ込められた時。スマホに取り付け?)が必須アイテムだとか。さらに言えば、避難所を巡回できるトイレトレーとお風呂トレー。そして避難所で深夜手足の冷え防止のためのビニール袋(50年前の早稲田100キロハイクで実証済み(?))ですかね。(橋)